

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19720021

研究課題名 (和文)

ゲルハルト・リヒターの政治的フォト・ペインティング作品についての基礎的研究

研究課題名 (英文)

A fundamental research on the political photo-paintings of Gerhard Richter

研究代表者

浅沼 敬子 (ASANUMA KEIKO)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：90372789

## 研究成果の概要 (和文)：

ゲルハルト・リヒターによる 1960 年代のフォト・ペインティング作品 (写真を元にした絵画作品) については、リヒター本人の言もあって、多くの研究者がその政治的、歴史的意味を指摘することに慎重だった。しかしミステレク=プラッゲの基礎研究(1990/1992)以降、近年では、2007 年のディートマー・エルガーやディートマー・リューベルの指摘に見られる通り、リヒターのフォト・ペインティング作品のさまざまな意味が指摘されている。

本研究の第一の成果は、ミステレク=プラッゲにならって、ドイツの週刊誌「シュテルン」「クイック」「ブンテ」「レヴュ」「ノイエ」(「レヴュ」と「ノイエ」は 1966 年に統合された) の 1962-66 年を再調査し、さらに「シュピーゲル」誌の調査、前誌の 1959 年、1967 年分等の調査を加えて、リヒターが切り抜いた約 160 枚のうち、約 70 枚の写真の出自を特定したことである。それによって、ミステレク=プラッゲやエルガーらが部分的に指摘した、リヒターのフォト・ペインティング作品の歴史的、さらには「悲劇的」意味が、より説得力ある仕方

で指摘されるに至った。

本研究の第二の成果は、1960 年代のゲルハルト・リヒターのフォト・ペインティング作品から、1988 年の『1977 年 10 月 18 日』を経て、ドイツ国会議事堂のために制作された 1998 年の『黒、赤、金』にまで通底する意味的一貫性を指摘したことである。『黒、赤、金』は、一見すれば抽象的作品だが (これは油彩ではなくガラス作品である)、よく知られているように、リヒターはこれを「ホロコースト」写真をもとにした、1960 年代以来のフォト・ペインティング的作品として構想していた。従って、1960 年代から 1990 年代まで、リヒターの試みの一貫性が指摘され得るのである。こうして、リヒターの画業を 1960 年代から再構成することによって、従来個別にしか指摘されてこなかったその政治的、歴史的意味を、一貫したものとして描き出したのが本研究の重要な成果である。

## 研究成果の概要 (英文)：

About Gerhard Richter's photo-paintings (paintings from photos) in the 1960s, mainly because of Richter's sayings, many researchers couldn't point out their political or historical meanings without some hesitation. But after the fundamental research by Misterek-Plagge (1990/1992), and more recently, as Dietmar Elger and Dietmar Rübél have discussed (2007), various meanings of Richter's photo-paintings have been indicated.

The first result of this research is to have been found about 70 magazine photos of approximately 160 photos Richter had clipped out, through re-researching German weekly magazines like *Stern*, *Quick*, *Bunte*, *Revue*, *Neue(Revue und Neue* were united in 1966) from 1962 to 1966 as Misterek-Plagge did, and furthermore, also researching *Spiegel* and all magazines in 1959, 1967 and more. And the historical, more accurately, 'tragic' meanings of Richter's photo-paintings were revealed more persuasively than the limited

results of Misterek-Plagge and Elger.

The second result is to be pointed out there is a meaning's consistency from the photo-paintings in the 1960s, through "18.October, 1977"(1988), to "Black, Red, Gold"(1998) for the Reichstag in Berlin. The work "Black, Red, Gold"(1998), which is not an oil painting but a colored glass work, is to be seen as some abstract painting superficially, but it is well known that Richter had another plan as something like his photo-paintings in the 1960s, based on the photos of *Holocaust*. So, in the trials of Richter, we can recognize a consistency from the 1960s to 1990s. Thus, through re-arranging Richter's works from the 1960s, the political, historical and 'tragic' meanings were described as a consistent issue throughout his famous works, which had been indicated just individually, just about his individual works. That is this research's significant result.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	420,000	2,620,000

研究分野：美学美術史

科研費の分科・細目：2806

キーワード：ドイツ現代美術史、ドイツ近現代史

## 1. 研究開始当初の背景

ゲルハルト・リヒターの写真を基にした作品群については、近年ではディートマー・エルガーやディートマー・リュールらによって、その政治的、歴史的意味、より包括的かつ適切に言い換えれば、犠牲者と加害者という意味が指摘されてきた。(in: *Sechs Vorträge über Gerhard Richter*, Gerhard Richter, Gerhard Richter Archiv, Autoren und Verlag der Buchhandlung Walther König/Köln, 2007)

しかし制作者であるリヒター本人にそうした解釈を否定する発言が少なくなく、研究者の多くは、半ば確信しながらも、リヒター作品の政治性を表立って論じることに慎重だった。

また、現在公刊されているリヒターのカタログ・レゾネ (*Gerhard Richter*, 3 vols. Bonn: Kunst und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland GmbH, 1993) における不備の多さも、彼のフォト・ペインティング作品の総合的調査の進展を妨げたといえる。というのも、そもそもどの時期に、どれだけの、どのような作品が制作されたのかが明らかにならなければ、その元となった

写真の特定作業も部分的にならざるを得ないからである (カタログ・レゾネは、現在ドレスデンのゲルハルト・リヒター・アルヒーフにてなお制作中である)。従って、リヒターのフォト・ペインティング作品について、元の写真の被写体に着目しつつ、政治的、歴史的意味が指摘される場合においても、例えばナチス・ドイツの安楽死制作の犠牲となった『マリアンネおばさん』(1965)をめぐるヘンリエッテ・コルプ (1998) やユルゲン・シュライバー (2005\*ただしこれは研究書ではない) らの指摘のように、個別作品の検証に留まらざるを得なかった。

こうした状況で、1990年代初頭にイングリッド・ミステレク＝プラッゲが行なった調査 (*Misterek-Plagge, Ingrid, "Kunst mit Fotografie" und die frühen Fotogemälde Gerhard Richters, Münster/Hamburg: Lit, 1992*) が研究者にとって唯一の参考書となってきたが、それも既に20年も前の調査のため、調査対象の不足といった不備が否めなかった。

## 2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、元となった写真を元の雑誌記事の内容と照合することで、リヒターの1960年代のフォト・ペインティング作品の政治的、歴史的意味を明らかにすることであった。

前項で触れたように、制作者であるリヒターは、たびたび自らの写真選択に意図がなかったことを強調してきた。それに対して、たとえ画家本人が意識していないにせよ、リヒターによる写真選択が完全にランダムなものとはいえないことを、研究者は元の雑誌記事を特定することで証明しようと試みた。もちろん、写真を切り抜き、描き写したのが画家本人である以上、そこに画家の「意図」が働かざるを得ないわけだが、画家がそれらの写真に何を看取したのかを他人が推し量ることは難しい。従って元の雑誌記事が特定された後も、何故それが取り上げられたのか不明の写真は今も少なくない。

とはいえ、リヒターが選択した写真には、ナチス・ドイツと第二次世界大戦の時期に青少年期を過ごし、大戦後分割された両ドイツのいずれもを経験した彼本人の個人的経験（個人的写真）と結びついた、現代ドイツ史の断片が、あるいはそれらへのリヒター本人の執着が認められるに違いないという確信によって、本研究の第一段階は遂行された（ただし、2009年の段階ではリヒターは既にそうした政治社会的領域とは違った領域に関心を移しているとのことだった）。

研究の第二の目的（第二の段階）は、リヒターによる「ホロコースト」の絵画化（作品化）の試みを再構成することであった。これは本研究の最終目的でもある。

1967年、リヒターは強制収容所関連の写真切り抜き、フォト・ペインティングの手法で描こうとしたが失敗する。1988年に彼が、ドイツ赤軍を主題とした『1977年10月18日』を完成させたとき、彼はこの作品に久しぶりに使用したフォト・ペインティングの手法でホロコーストをも描けるのではないかと期待を抱く。1996-67年頃、ドイツ国会議事堂西側入口作品の依頼が来た時、リヒターはやはりホロコースト関連写真を集めている。つまり、ここで彼はフォト・ペインティングの手法でホロコーストを描こうとした（あるいは作品化しようとした）わけである。

ここに至って、1960年代初頭からリヒターがフォト・ペインティングによって政治的、歴史的テーマを取り扱っていたという研究者による指摘が意味を持つ。リヒターの画業には一貫性がある。リヒターは1960年代のフォト・ペインティングによって、折に触れてさまざまな政治的、歴史的テーマを取り扱って

きたが、それらはホロコーストの絵画化（作品化）という試みにつながっていくのである。そのことを証明するのが、本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

本研究の導きの意図となったのは、前々項に挙げたミスレク=ブラッゲの研究である。彼女は、*Stern*, *Quick*, *Bunte*, *Revue*, *Neue*の各週刊誌を、1962年から1966年にわたって渉猟し、『オズワルド』（1964）等リヒター作品の元の写真を特定し、さらにそれらを分類した。しかし、彼女がこの研究を行った当初リヒターのカatalog・レゾネが刊行されていなかったこともあり、彼女が同書によってその元の写真を公表したリヒター作品は13例に留まった。加えて、絵画と写真の媒体の違いに着目する彼女の研究方法によって、元の雑誌写真がいかなる意味を孕み得るかという検証は、充分にはなされなかった。

研究者は、ミスレク=ブラッゲにならって、*Stern*, *Quick*, *Bunte*, *Revue*, *Neue*といった全国誌を中心に（記事内容によっては*Spiegel*や*Bild*も参照した）再調査を行なった。リヒターが写真を切り抜いた時期が必ずしも1962-66年に限らないため（中には1959年のものも含まれる）、ミスレク=ブラッゲの1962-66年に加えて、1959、1967、1973、1974年を重点的に調べ、リヒターが切り抜いた雑誌写真を探した。

なお、その際、現在刊行されているリヒターのカatalog・レゾネの不備を補うべく、ドレスデンのゲルハルト・リヒター・アルヒーのディートマー・エルガー氏の下で、現在公表されていない写真資料をいくつか補った。

（とはいえ、レゾネ掲載（予定）作品は今後さらに追加されていくであろう。）

1960年代を中心とした以上の調査は、申請が採択される前より行なっていたため、2008年度末にはほぼ完了した。それによってリヒターが雑誌写真より切り取ったと思われる写真約160枚のうち、約70枚の出自あるいは意味が分かっている。

2008年度から2009年度にかけては、ドイツ国立図書館等で、リヒターが切り抜いたホロコースト写真の出自を特定しようと試みた（画家本人にも尋ねたが、残念ながら回答は得られなかった）。ホロコースト写真について、もし本当にその一枚一枚について出自を特定しようとするれば、大変な時間と労力が必要であろう。従って今回はリヒターがどの書籍から写真を切り抜いたかを明らかにしようと、ポーランドやドイツ、アメリカの諸書籍にあたったが、残念ながら特定はできなかった。とはいえ、1967年にリヒターが切り

抜いたとされる写真群については、ごく一般的なホロコースト関連の書籍にも多くが掲載されていた。そのことは1997年の切り抜き写真群にも言え、1967年写真群についてはその9割を、1997年写真群についても少なくともその7割を、いずれかの書籍に見出すことができた。とはいえ、写真の性質上、どの書籍の情報を信ずべきか悩むところであり、リヒター本人がどの書籍を使用したかわからない限り、それらの写真にいかなる「意味」が認められたのかを知ることもできない。

2008-2009年には、それに加えて、ドイツ国会議事堂の芸術プロジェクト全体についても調査を行なった。どの時期に、誰によって、どのような基準によって作家が選択されあるいは変更されたのか、どのようなエピソードがあったのか、等をベルリンの芸術図書館の書籍等で調査した。なおこの過程で、ベルリンの国会議事堂への設置が問題視された芸術家ヨーゼフ・ボイスについても、多くの資料にあたって情報を得た。

#### 4. 研究成果

第一の成果は、リヒターが1962年以降切り抜いた写真群の少なからぬ数が、さまざまなレベルで政治的、歴史的意味を担っていたことが明らかにされたことである。(ただし、この「政治的、歴史的意味」という表現は、既述のように「犠牲者と加害者」と言い換えた方が本来は適切である。)一例を挙げよう。

従来1965年の『赤の頭部』(1965)は、現在もただの中年女性の肖像とみなされてきた。しかし研究者の調査によって元の雑誌記事が特定されたことで、全く異なった相貌を帯びる。元の雑誌記事で、彼女は、第二次世界大戦で死に別れたと思っていたものの、実は生きのびて、しかも近所に住んでいたふたりのドイツ人兄弟の、死んだ母親の肖像なのである(Bunte, 02. September, 1965, 20-22)。

第二の成果は、調査の過程で、リヒター作品の制作年等の誤りが正されたことである。これも例を挙げよう。現在のレジюмеでリヒターが二番目に制作したフォト・ペインティングとされている『スケーター』(1962)は、元の雑誌記事が1963年刊のため、実際の制作年は1963年に下る。

第三の成果は、ゲルハルト・リヒターというドイツを代表する芸術家の画業に対して、新たな解釈を促したことである。既述の通り、リヒター作品に特定の、しばしば政治的あるいは歴史的意味があるという指摘自体は、これまでも縷々なされてきた。その意味で本研究は必ずしも「新たな解釈」を提示するもの

とはいえないかもしれない。しかし従来の研究は限定的であり、個別の検証に留まってきた。1960年代初頭のフォト・ペインティングに立ち戻り、さらにその後のリヒターのフォト・ペインティング作品に通底する政治的、歴史的意味を指摘するのは、その包括性において例を見ない。

第三の成果は、ドイツ国会議事堂芸術プロジェクトの調査や、従来「政治的」芸術家とみなされてきたヨーゼフ・ボイスについて調べることで、戦後ドイツ美術と政治とのかわりを多面的に把握し得たことである。

ただし以上の成果をすべて2009年度中に取りまとめ執筆・発表することができなかつたため、2010年度中に少なくとも1960年代に関する調査結果を公表する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 浅沼敬子、ゲルハルト・リヒターのフォト・ペインティング作品(1962-67年)に使用された作品群について、北海道大学文学研究科紀要、2008年、査読無、1-31

〔学会発表〕(計3件)

- ① 浅沼敬子、ゲルハルト・リヒターのフォト・ペインティング作品における悲劇のモチーフについて、美学会第58回全国大会、2007年、北海道大学
- ② 浅沼敬子、ヨーゼフ・ボイスの作品と思想、日本シェリング協会、第17回総会、2008年、弘前大学
- ③ 浅沼敬子、ゲルハルト・リヒター作『黒・赤・金』(1998)をめぐる、平成21年度美学会東部会例会、2010年、北海道大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

\* 書籍の分担執筆。

- ① 浅沼敬子〔監修・執筆〕、ヨーゼフ・ボイス関連用語集、『Beuys in Japan ヨーゼフ・ボイス よみがえる革命』、フィルムアート社、2010年、176-210

\* 関連論文

- ② 浅沼敬子、ヨーゼフ・ボイスの思想と作品、シェリング年報、2009年、査読有、83-93

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

浅沼敬子 (ASANUMA KEIKO)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：90372789

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：